昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十四年三月十五日発行（毎月一回、十五日発行）
（通第一二〇号）

慈光

第十一巻　第三號

目次

刊行満十年……花田正夫…(1)
超人生と即人生（一）……近角常観…(3)
善知識を訪ねて……福島政雄…(9)
過去の夢未来の夢……三瓶徳英…(13)
如来さまの御用を……長谷顕性…(16)
一道会の記（三）……聚墨生…(18)

刊行満十年

花田正夫

慈光誌もこの三月で満十年を迎えました。これひとえによき師、よき友の、表に立ち裏をまもり、物に心に、限りない御念力を蒙りましたお蔭であります。

私自身は痼疾難治の体、蓬戸不出の身とて、その日、その日に、私のいのちにひかりとなつてとどいて下さる、よき師の法語や、よき友の信味をこころにとどめて、先ず第一に私が頂き、それをそのまま編集させて頂きました。そういうことを続けて参りましてフト顧みますと十年がすでに満ちているのに驚いているような次第であります。

さて昔から「十年一昔」と申しますが、これで慈光誌も「一昔」の歴史を持つことになり、これからまた新しい第一歩を踏み出すことになりました。それかと云つて別に珍らしい思考も持ちません、ただ私の生命の限り今まで通りに続けさせて頂きます、そのことが現在の私に与えられた唯一筋の道なのであります。

なお昔から「十年一日の如し」と申しますが、この十年繰り返して御送り申し上げました慈光誌も、そのかなめは親鸞聖人の常の仰せひとつにおさまるのであります。これからも亦そのみこころを頂いておとどけ申すばかりであります。敗戦後とくに、新思想ということがやかましく云われますが、真実の宗教の道は、新しいとか、古いとかいうことがすでに迷いでありまして、道に古今なく、大道常に長安に通ずる程のものでなければなりません。最も古くして、日々にあらたなるもの、そこに真実の新鮮さがあります。ここに刊行十年の道標といたしまして、聖人の常の仰せ三つを掲げます。

一、聖人のつねのおほせには、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたぢけなさよ」と、御述懐

さふらひし云々。

歎異抄末。口伝鈔上。

二、つねの御持言には「われはこれ賀古の教信沙弥の定なり云々」

改邪鈔本。

三、つねに門徒に語りてのたまはく「信謗ともに因となりて、同じく往生浄土の縁を成ず」

報恩講式文。

住田智見先生は「この三つの御持言を注意して翫味すると、真宗の法義も、日常の心地も、宗徒としての道も、おのづから会得せられる」と『真宗要義』に述べて居られます。さて聖人の七百回忌が近づきましたので、種々の人が聖人の伝記なり思想なりを鳴り物入りで紹介して居りますが、顧みますれば六百五十回忌の頃もやかましく宣伝せられております。然し一水四見と申しまして見る人の主観によつて聖人ならぬ聖人が巷に増して、真偽の見分けもむつかしい状態であります。

この時、真実の聖人にお会い申す道は、聖人の常の仰せをちきぐ〳〵に味わわせて頂くのが、一番たしかで、間違いのない道だと思います。なお聖人の御著書も沢山ありますけれど、その人に触れる近道は、常の仰せでありましょう。

〃あはれなるかな、恩顔は寂滅の煙に化したまふといへども、真影を眼前にとどめたまふ。かなしいかな徳音は無常の風にへだたるといへども、実語を耳の底にのこす〃

まことに〳〵幸なる哉であります。耳底にのこる実語から汲めども〳〵つきせぬ法水はそこにあふれ、聖人の真面目はそこに躍如として影現しますのであります。

更に、晩年の聖人の御本尊は、帰命尽十方無碍光如来、の十字名号でありましたことも、私共といたしましては忘れてならぬ大事であります。

曇鸞大士讃

尽十方無碍光は、無明のやみをてらしつつ
一念歓喜するひとを、かならず滅度にいたらしむ。
尽十方無碍光の、大悲大願の海水に
煩悩の衆流帰しぬれば、智慧のうしほに一味なり。

天親菩薩讃

尽十方の無碍光仏、一心に帰命するをこそ
天親論主のみことには、願作仏心とのべたまへ。
願作仏の心はこれ、度衆生のこころなり
度衆生の心はこれ、利他真実の信心なり。

○無碍とは、衆生のいかなる悪業煩悩をもあきれず、すてたまわぬをいうと聖人が和訓して居られます。思えば聖人九十年の御生涯はまことに障りの多い、波瀾やむことのない御生活でありました。幼にして父母と別れられたことはとも角として、念仏の法難、関東から京都への御生活、更に八十すぎられて、御子善鸞大徳との義絶、このことは、どんなにお悲しいことでありましたことか。あゝ然しそれなればこそ、如来の無碍光をいよ〳〵渇仰せられ、それひとつがいのちとなつておられるのであります。

超人生と即人生（一）

近角常観

一、超人生

超人生とは信仰の力で人生の五分々々を超絶することである。一家にありても各人が善し悪し、人生の五分々々を言うて居るのでは、信仰なることが意味をなさぬ。信仰の力で五分々々を超絶されるところで有難いのである。従来の信者でも善きに就け、悪しきに就け、何事でも前世の因縁、宿業と諦めることに言うて居る。普通ならば人を咎め愚痴を言う可き処を、これも前世の因縁、業報と、こゝで本当に思い切り、離れることが出来るなれば、人放れが出

帰命、尽、十方、無碍光、如来。かぎりなく濁り、はてしなく苦しむ身も、この如来ましましてここにやすろうことが出来るのであります。白雲悠々として去来する如き、自然法爾の御生活も、そこに恵まれ給うたのであります。

刊行満十年の道標として聖人の御本尊と、御持言を掲げました。最後に再び今迄に蒙り、更に生ける日の限り頂く御信交を深く謝しまつります。南無阿弥陀仏々々々。

来るわけである。けれども言葉に言うてる丈で、心に本当にそれが出来ない、ただ心を押えてそう言うてる丈なのは超人世ではない。処が信仰には本当にそれ放れて落ち着ける処があるから、超人生である。

処が従来の信者が離れた如く言うて居て、心に本当に離れられて居ないは、肝腎な処が抜けてある。それは風吹けば寒く、冷い者が人間である。それを何程、因縁、約束と言うて見ようが、寒いものは寒い。故にそれだけでは、矢張り寒いの思いが離れられぬ。処がそれが離れられるは、『汝、風吹き、寒いであろう。気の毒だからこの暖炉にあたれ』と、この如何な風雪をも、それを温める処の火を以て、温めて呉れた時には、離れられる。外界の風を止め、雪を消しに行かなくも『その風雪で汝が冷い限り温めよう』と、この温める火に遇えば、我々人生の風雪から解脱するを得、人放れをすることが出来るでないかと、いうのである。こは人生を離れて生活することが出来ると言う時は、如何にも著しく聞こえ、何うして出来るかということになるのであるけれども、今言う如く、何処までも温めて貰える慈悲に遇うもの故、それが出来るのである。

併しこれ程の人生の風雪を、それが気に懸らぬ迄に温めてくれるには、一通りの火ではいかぬ。如何なる風雪にも打ち勝つだけの火で無くてはいかぬ。そこが阿弥陀佛の超世無上の本願というはこのことである。

普通の人間の慈悲の火ぐらいなら、超世で無きも、如何なる風雪があつても、それに打ち超えて温める温いもの故、超世無上という。親鸞聖人は『超世の悲願』だとか、『超発無上殊勝願』だとか、なか〳〵この超の字を使つて居られる。或は正信偈には『超発希有大弘誓』とか『即横超絶五悪趣』とか。又『大経』には『我超世の願を建つ』とか、又『和讃』には『超世の悲願ききしより』とか。斯く超の字は、当り前以上に飛び超えた味わいである。人間の体温ぐらいの慈悲ならば、超えたで無きも、ずつと飛び超えた、——『御文』にも『諸佛の悲願に超えすぐれたる』とありて、あらゆる温かさを飛び超えた。其の上〳〵と如何なる寒さをも温めてしまう処の火とのことが超世である。

処が一応温まりても直ぐ寒くなり下つてしまうは、火の方が一応の温かさ故、五分々々になりて最後まで温まれぬのである。故に如何なる風雪でも気にかゝらぬ迄に人生を離れさせて仕まうは、そうする丈の超絶した火で無くてはいかぬのである。

処でこは信仰上大切なることにて、この人生を飛び離れた処が無くては、信仰聞いても何にもならぬのである。在

来の真宗の人は、三世の諸佛にも呆れ果てられたる我等を救わんとのお慈悲など、文句では知つて居るも、それが何処が温いのだか、唯文句を知つてる丈のことになり易い。又青年の人は、信仰がどうこう言うて居ても、何時までも人生の善し悪しに追随して居るのでは何の詮もない。如何なる困難、境遇が来ようと、それと離れて安心の立場を与えらるるで無ければ信仰の甲斐は無いのである。それがなか〳〵そうなり難い思いがするのであるけれども、それが離れられる処が値打ちである。

二　隠れたる思想の法則

そこでこはちと信心頂きの話になりて聞き難いかと思うも、之に苦心する人が多い故、これで申して見ようと思う。頂きたいで聞く人の最も苦心するは、

『お慈悲が有難く成り度い、喜ばしく思ひ度い』

これで苦心して居られるが多いのである。最も中には人生の困難苦悩を解脱ぜんとして聞かれる人もある。（これで聞くのが信仰は一番分りよい）。併しその人でも

『それはそれとして、信仰が分れば解ける』

の聞き方であるから、同じである。処でそれで行き、疑い晴れ、有難く思えるようになるか、それがなれぬで困つて居られるが多いのである。

処でそこにこういう思想が一寸ある。『佛が有難くなれなければ信仰にはならぬの故、有難くなれなければいかぬ』と、これが信仰のことにまで五分五分が出ているのである。そして『だから喜べぬのはいかぬ、頂かぬのはいかぬ』とみんなこれになつてある。

昨日も或る老婆が『私はどうしでもいけませぬ。疑いが晴れませぬから。六十年来聞いても疑いが晴れませぬから、これでどれ程坊様を困らせたか知れませぬ』という。至つて真面目なる尋ねである。仕舞いには『私の疑いなぞは人のと本からが違うのですから、いけませぬ』という。――これは今の言葉にすると、根本的だということである。それは人の如く罪が深いから、悪いから助からぬなどでなくて『私のは佛様が有るのかを疑うのですから』と。これは青年諸君の賛成しそうなとこである。成る程根本的である。『私はこれを思いますと、どんな有難いこと聞いて居ても、皆駄目になつてしまいまして、こんなで聞いて居ても仕ようがないと、家に帰つて、蒲団被つてねて見ても矢張り駄目であります。しまいには坊様にも呆れられ、あんな婆は寄せつけなと言われて仕まいました。』と。思想上に於いても明析なる不審故、これを明析に解決して来なければいかぬわけである。それを申して見ようと思う。

するとこゝに、何人も口にせぬけれども、心の下敷きに

なつてあると言わんか、常識と言わんか、こゝに隠れたる一つの心の法則がある。それは引力で上の物が下に落ちると同じように『こちらが斯く疑うにより、疑う者はいかぬと屹度斥けられる。』と。これが出て来るのである。『佛が御座るのかなど、佛の前で大それたこと思うのは、そんなこと思うのがいかぬ』と、こゝが五分々々になりてある。こは皆様でも佛が有難ければよきも、有難く無いはいかぬとなりて居られるに違いない。此方が人を悪しく思えば、思われた人はいかぬというに決つて居ると、こゝにチヤンと五分五分がある。これが超絶し難いのである。

今の婆さんが行きつ戻りつ、何うしても超絶し難かつたはこゝである。これは私がよく皆様に『誰が有難くならないかぬと言いましたか』。『誰かてみんなが言うて居ります』、『みんなつて誰ですか』、誰も無い。それにそう思える、あれが一つの思想の法則である。それで六十年来、有難く思えぬでいかぬ〳〵と、いかぬ筈である。それでは次生までやりてもいかぬのである。

三恆河沙の諸佛の出世のみもとにありしとき

大菩提心おこせども自力かなはで流転せり。

これでは何生までやりてもいかぬは、いかぬ思想の下になり立つているからである。

三　超世の本願の原則

そこで私が婆さんに申したは、『貴方はそういうが、佛様は何う思うて御座ると思うて居るか。わたしが有難そうに拝むから、佛様は黙つて御座るか知らぬが、実は腹には佛様が御座るか知らんと思うて居るのぢやが。表向きは有難そうにしてるけれど、心には無いのでありますがと、これで聞いて居るのだろう』すると婆さんは『佛様は腹も御覧でしようから』と言うから、そこで私は『それでは佛様は疑う者はいかぬとおつしやるか。佛様はそうでは無いのぢや。あいつ殊勝そうにして居るが、心の中には疑つて居ることは百も知つて居る。故にいかぬといえばいかぬに決つて居るが、そのように妙なこと思う奴故、よけ可哀想に思う』と――こゝは人のことにすれば分りが早いのである。監獄で囚人を教誨する時は、囚人は双向うのが性分故、双向うのがいかぬとなると、教誨の所詮は無い。あゝいうように腹立て易い、ひねくれた性分と成り果てたのが哀れ故、あれは咎むべからず、あれは悪しく思わぬようにと、囚人に向うが、少くも教誨の意義である。人間に必ずしもそれが出来るとは言わぬも、少くも悪しきに向うのはこうなくてはならぬ。と同じに婆さんが『こんな疑うのがいかぬ』と言うに対しても、超世の本願の原則では

『いやそう思えるは無理ない。そこは諸佛でも超えられぬ』――善き者ならよい、修行出来る者ならよいが諸佛であるも、それでは超えられぬから、最後に阿弥陀佛が出現して下されたかと迄思うことである。

前橋の星竹蔵という樵夫は、佛を拝みながら、佛は本当に生きて居るのか、焼き火箸あてると血が出ると聞くから、一つやりたいというようなことまで思うと言うた。熱心な人によくある状態である。四国の或人は絵像拝みながら、あの絵像さんを鋏でチョキンとやりたいと思うと言われた。又或る僧分の方は、若い時非常に喜んで人に感心せられたのが、大きくなつてから喜べない。親から『お前は若い時は嘘言うて居つたのか』と言われ、余りに苦しくて、佛様の頭に埃払あてたと言われた方もあつた。之がみんなこういう心を起すのがいかぬと。こは日常生活でも我々が善く出来ぬからいかぬとなると、いかぬ〳〵で何処までも起き上りようが無くなつて仕まうのである。それは皆悪しければ悪しきはいかぬと斥けられるの原則から来る。故に今の監獄教誨の如く、一つ変つて来る処が無くては。

『双向うがいかぬで無い。双向うを哀れに思うのである。それは如何にも境遇上双向う思いも起ろう』――若し近頃の労仂問題の如くば『そういう風に気の荒びて来たのが気の毒である。故にそれで何程逆らおうとも、それを此方は悪しくは思わぬ』と、これが現われて来ねばいかぬのである。

処でここで『一応はそうもあろうも、飽くまでこちらがやり通したらば、如何な同情深い人も呆れてしまわれるだろう』と、これがある。するとそれは『こちらの悪いのが一応で無い故、如何なる慈悲者でも、こうあつては斥けられる』とこれになる。

今朝も婆さんに『昨日は分つたようだが』というと、『イヤ矢張りいけませぬ、昨晩段々考えて見ましたら』というたがそれである。

処が佛の慈悲は『そういう何処までも疑い深い、双向いの性分を哀れに思うの故に、何程それを思おうと、何処々々までもそれに呆れぬぞ』と、ここ飛び超えた心で向われる超世の本願故。結局の問題は、こちらの隔て、双向いの力の方が強いか。それに呆れず、斥けず、真実にして下さる力の方が強いか、それで決まることになる。処が一応二応で呆れられる位なら当り前であるも、超世の本願は『如何程、寒く冷い心で双向うも、それを哀れに思いこそすれ、悪しくは思わない、呆れない』と。茲を私の思いで言えば『私の寒いのを温めてやろう』ではまだ分りにくい。

むしろ『その寒いのに呆れぬぞ、捨てぬぞ』と、何処々々までも此の者にいうて下さることが温いということなのである。

四、直に来れ

処がここが却々分り難い。この間も或方に二時間程話して『分りましたか』『筋は分つたけれども、何うも喜べぬので』と言われる。それでは喜べない。冷たいのに呆れて下さらぬことを自身の上に聞いたので無い、余所に聞いて居る。二河白道の譬喩に『真に来れ』とあるは『喜べぬでいかぬ。悪しくていかぬ』なら直に来れ、でない。喜べたら来い、善くなつたら来いである。

『直に来れ』は喜べぬ人間に『その喜べぬを能く見たのだから、お前の方で喜んだり、疑いとれたりするので無い。その汝の喜べぬを可哀想に思うて、此方は何処までも、それを能く護るのだから』と、これ故お慈悲に入ることが出来るのである。

それを大抵の人が、喜べたら、有難くなつたらと取るからお慈悲に入れぬ。故に若し喜んで信仰に入つた人があつたら、それはこしらえ物である。寧ろ『鉄は中心まで冷たいということを諒解したのだから、その冷たいのが辛かろう、寒むかろう。その冷たいのを悪く思わぬ。その鉄の心迄冷え切つたのを我能く汝を護ろう』と、これが有難いとその鉄の者が頂けたのが信仰である。故に直に来れは、喜んでで無い。喜べぬ我等に、それに言うて下さるが『直に来れ』である。それを『然ういうお慈悲の佛があるのか』などと、そんな遠い所にあるので無い。今現に自分が喜べぬ。然るにその喜べぬに『何処までも呆れぬぞ、悪しく思わぬぞ』これが直き〳〵温めて下さる処の火なのである。

聖人は『直に』の言を『諸佛出世の直説を顕しめんと欲して也』　（愚禿鈔）

今日は直観、直覚という言葉がある。火に触れば『熱い！』これが直観、直覚である。

信仰は佛の声を聞いてから有難くなる、そんな廻り遠いので無い『今汝が寒く、冷たいのを、それを察したぞ、見てやるぞ、それを悪しくは思わぬ、何処までもそれに呆れぬのだぞ』と、それに直き〳〵言うて下さる御真実が『直に来れ』である。こゝは余程問題に切迫した処を申して居るのであるが、御了解を得たであろうか。

殊に人生問題で我々自分の境遇が情無いとか、見てくれ手が無くなつたとか、世の中は強い者勝ちだとか、そうなつた時には人が冷やかに見えたり、相手にして呉れ手が無いように見えたりして、結局人間の五分五分で動きがつかなくなつた時が、人生の明るみが無くなつた時である。

その時は『然ういう我に温かくして呉れる人があればよいがな！乞は誰も考えるのである。私なども『自分が人に、隔て、疑い無く向えればよいがな！』とは頻りに考えた。そうすると人も自分に然うしてくれるから。処がそうなればよいも、ならぬから身動きが出来ぬのである。処が

善知識を訪ねて

福島政雄

さあここで、私共の考えねばならぬ問題があるのでありまして、一番首の大声聞、舎利弗、目連、この人達は、この逝多林、祇園林に居りながら、お釈迦様の今現わしておられるところの、如来の神力、何とも言えない神様の様な力というものが見えない。菩薩の境界というものが見えない。それだから聞いても解らぬ、知ることが出来ない、見ることも出来ない、憶念、よく思うことも出来ない、観察、よく細かに確かに見ることも出来ない。それだから深く思いはかることも出来ない、考えることが出来ない、悟り入ると云うことはもとより出来ない、一体分別することが出来ない。

これは仏菩薩の境界というものは声聞や縁覚というような二乗の境界でないからして、このお釈迦様が広大なる不思議な境界を現わしておいでになる、その世界というものがわからぬ、見えない。修行も出来なければ、そこに落着くことも出来ない、それを聞き示すことも出来ない。そこを種々の譬をもつて説かれてあります。

今佛の慈悲は『イヤ我は汝の悪しきを悪しく思わぬ、哀れに思う。それは汝の性分ぢや。無理無いと見るから、その為に毫末も汝をいかぬとはいわぬ。否弥々見捨て難く思う』と、之が起つて来ることであるから、茲は際立つた処である。

未　完

ここもよい加減に読んで参りまして、それは声聞、縁覚と仏・菩薩と云う境界は違うのだから、舎利弗、目連と云う人達は、釈尊の第一の御弟子であつたけれど、何にも分らなかつた、これは大乗仏教と云うものを明らかにするために舎利弗、目連という人達を槍玉にあげて、斯う云う境地ぢやないぞと、わざとこう云うことを言つてあるのだろう。維摩経にもそう云う場面がある。それ位のことに考えて居りましたのでありますが、今度改めて読み直し始めますというと、そんなことぢやない。これはこの舎利弗、目連とお経には出ていますけれど、舎利弗、目連はそうした境地が解つたに違いない。舎利弗、目連を代表にして言つてあるのは、矢張りこの私のことだ。私自身が、どんな釈尊が広大無辺な、そして又深い境地を現わしてお見せになつても解らぬ、つまりもうちつと端的に申しますれば、私が華厳経を読んで解らんのであると、こういふことをここに言はれてあるのであると、これは自分の問題であるという気がして参りましたのであります。そうでありますからして、どうもこれはいよ〳〵私というものが華厳経というものを本当に読む力がないのであるということになりますのであります。そこでそう云うことを私の胸にぐつとつき抜かれますのであります。

お経では、そこに集つて来た十方の菩薩が仏の徳を讃歎するところの偈文が沢山、一人々々の菩薩が歌を唄うのであります。偈文というのは御承知の通り歌なのでありまして、この佐々木先生などは華厳経全体が歌の様であると云つて居られます。『華厳聖歌』というこんな本を御存命中に出して居られます。これは華厳経中の大事な偈文を皆この一冊の中におさめてあります。華厳経全体というものはこれでも解る、つまり華厳経全体が歌であると云つてあるのであります。成程そうでもありませう。

今の菩薩達が一人々々仲々念入りな歌を唄いまして、仏徳を讃歎いたしますのであります。

そうしてその次が、普賢菩薩が出て、何と云いますか、十種の法門、清浄名句と云つてありますけれど、まことの道がこんなものであるという、こう云う言葉をもつて、師子奮迅三昧というはどういふものであるかと云うことを説き聞かせるのであります。会座の菩薩方や、その他の人達に説き聞かせるのであります。

それも長いことになつて居りますけれど、その中で肝腎なことになつていることが一つ私の眼につきましたのは「一一の毛孔の中の、その刹、海、それから一切の刹々のごく小さな、微塵の数に仏はことごとくおいでになつてその道場に坐つておいでになる。そして如来は一つの刹に

安らかに坐つておいでになりながら、一切の刹に現われ給わぬはない」

こう云うことを言つてあるところが私の眼につきました。ところで、これが華厳思想の非常に大事なところであると前から承つて居ります。つまり一つの微塵の中に一切の世界がおさまるのであると。つまり一つの微塵のことがよく解れば一切の世界のことがよく解るというそう云うことでありまして、これは私自身といたしましても非常に有り難い、深いことであると思つて居るのであります。解り易く考えますと、我々凡夫としての人間といたしましても、一つのことが徹底的に分れば一切の世界のことが解るはずである。如何なる微塵のような小さな世界にも、そこに仏がまします。私なら私の見るべき世界、私の通るべき世界に、つまり本当に、徹底的に深く徹したならば、そこに仏を感ずる。そこに仏様を感じたならば、そこから一切の世界のことが解つて来るはずだと、こう云うことになると思います。

そんなことを申して私がそんなに徹底しているというのぢやありません。そう行くべきものだということを前から華厳経のことを読んだり聞いたり致します度毎に考えて居つて、そこまで行けばいゝなとは考え、また私として請い願つておりますことであります。

普賢菩薩がそう云うようなことを皆に偈をもつて申すのであります。

釈尊は、眉間の白毫相でありますから、あの法華経の場合と同じであります。この眉間に毛がぐる〳〵巻いていると云うのであります。その白毫相の中から大光明を放ち給うた。そうすると光明の中に又広大な美しい世界が現われて来ます。それは法華経でもあんなに種々の修行の姿が現われて来ているのでありますが、ここの場合では諸々の世界の諸々の衆生の姿が現われて見える、種々な修行をする仏の種々の姿が現われて見える。それからもう一つ、種々の三昧、何とかの三昧、何とかの三昧と並べてあります。多くのこの三昧の姿が見えて来るとあります。そこは法華経の場合と違うようであります。

つまり師子奮迅三昧の中で眉間から放たれる光の中で、今度は種々様々な三昧が現われて見えるのでありますからして、つまり師子奮迅三昧には一切の他の三昧を包容している。こう云うことになるのでありましょう。その心の種々様々の静め方というものを師子奮迅三昧にはみんな採り入れられてあると、こう云う意味なのでありましょう。

そしてそこには仏が種々様々な仏きをなされる、又説法をなさると、そして「一方を知つて一切方に入る」仲々こ

のむつかしいことなのでありますが、東の方なら東の方だけに向つて進んで居られるのだけれども、それが一切の方角に進んで居られることになる。これは仏様の仏きというものが縦横無尽に出るということなのでありません。こう云う種々の有様が大光明の中で現われて見えるのであります。

そうすると、諸々の菩薩達でありますが、不思議な光明に照らし出されて来ましたために、その心が非常に嬉しくなるのであります。「その心歓喜す」とあります。

そして次に文珠菩薩が「仏の威神力をうけて」。これは何時も繰り返して出て来るところでありまして、菩薩が何かこの一こと物を云う、ある仏きをするという時には必ずこの仏の威神力を受けてということになつて居ります。これがこの私共の問題にもなるという感じを持ちますのでありまして、実際私共は浅薄に考えて居りますというと、自分の力でやつているんだ、自分独りでやつているんだと、こういきますけれど、本当はすること為すこと皆、仏の威神力を受けてやつているのであるということに、それを気付かないでやつているのであります。そこをお経の上では繰り返し〳〵云われるのであります。文珠菩薩などが言われる時も、仏の威神力をうけて言われるのであります。

そして文珠はどう云うことを説かれるかと申しますと、今逝多林で説いてをるこの非常な不思議なことを、これはこうだ、あれはあゝだと云うことを聞いて説き明かされるのであります。

又前と同じことを言つてありますが「一切の刹の海のうち、極微の中、ごくこまかな中。又あらゆる十方の諸々の国土に、仏は一一のその毛の孔において、みんな恰く、その仏の姿を現わし給う」という、こんなことを繰り返して言つてありますが、これは最後まで折に触れて繰り返して申されるところの大事な思想であると感じて居りますところであります。

その文珠のそう云う説き示しを聞きますというと、諸々の菩薩は皆一一何とも云われぬところの仏の刹、極微塵の数ほどの大慈悲の門を心の中に会得したというのであります。そこまでがこの逝多林の全体の有様を映し出してあるところであります。

過去の夢未来の夢

三瓶徳英

古今東西、無量不可計の人間を始め、あらゆる生物は、過去を持ち、未来を持たぬものなく、その間現在の瞬間々々を無限の時間なる大河に押し流されて、浮きつ沈みつ、歓楽苦痛の悲喜に明け暮れて、際涯なき業にからまれて行く我を思えば、何とも彼とも見当は立たず、特に私はこの老齢となり、過去の事のみ偲ばれて、後悔や、怨恨など、思う事ことごとく夢の如しとしか考えられぬのであります。中国の有名な、呂生ではないが、私の生涯は一睡の夢であります。時々老人同志で話し合ってみると、大多数の老人は私の様な気持がすると云います。

この夢の世に、うつゝの生活をして居りながら、念仏を聞かせて頂いた事のみが、唯一の力であります。

近角先生は「何がどうあろうとも、どこ〳〵迄もお見捨てないお慈悲！」と仰せられました。又池山先生は「惨怛たる悔の残せし一一のあとかたもなき無碍の一道」と讃歎せられました。石見の医師で厚信な道哲という方は「夢の世に夢ならぬかのみほとけに救われて行く西のかの岸」と詠まれました。

夢の論理や歴史などは一向に存じませんが、私は近来頻りに種々雑多の夢をみます。近角先生の夢、親や妻の夢、友人の夢、ナンセンスの夢などであります。

私は今年七十九になりました。祖師聖人御正当の報恩講も無事に過させて頂き、一月下旬、温泉津町の御同朋、山本知好氏の御宅で泊めて頂き四五日湯治した時、同町の御同朋、今年九十七になられた油谷登三郎氏を訪ねましたところ、今日は娘に御馳走させるからゆっくり話そうと云われ、老人の部屋で炬燵であたたまりながら、御長女で、昔評判高かりし美人ミス、今は七十三才の未亡人の御歓待を受け、七十九の私と、九十七の油谷さんとの二老人の、過

去や、未来の夢物語は、興味の尽き難いものがありました。私が高寿を祝悦する詩の真似をして転句に、「三加百歳矍鑠色」と書きましたのが御気に入り、自分は実に矍鑠だ、今日は八十年間の夢物語りを聞かせるとて、若かりし時、商用で度々東京へ上り、吉原で散財した頃覚えたと歌を謡われ、私も歌いました。又他の人から時々長寿法を教えてくれと云われるが、別にこれと言って私には長寿法などないが、若い時から五原則を出来るだけ守ってきた。それは

「一、気はながく。二、心はひろく。三、いろうすく。四、つとめはかたく。五、身は下座に置く。」

というので、又食事は、酒は適度に、御飯は一椀限りとして、これが私の憲法だとのこと。

この油谷さんは往時、村長や、銀行の支店長も勤められた筈です。又浅原才市同行と寺詣り友達で、同行の事についてくわしく話して下さいました。

私も才市同行と度々会い、下駄屋の御宅へも行った事がありますので、この席に才市翁も聞いて居られる様な感じがしました。私が同行の数多い語録の中で、面白く、有難いと思う分を言うて同行を偲びました。

「わしやーまんだ極楽う知らんが、極楽はどこかな。こんなばか、おどりやーまんだ極楽う知らんか、大ぶんばかだな。極楽は、なんまんだぶが極楽だよ。ふんそうかい、そりやあありがたい、ありがたい」

と書いて、其次の項に、

「ありがたい〳〵。ありがたいのは才市ぢやないよ。ありがたいのは親様で、親様はナンマンダブツ。これに才市が救いとられてナンマンダブツ〳〵」

と云われた事は、浄土論の一法句と、三種荘厳の、広略相入に合致する事が思われますと語り合いました。

又親についての話が出ました。今時の青年の中には親を軽蔑する様な気分が段々濃くなるではあるまいか。秩序も礼儀も無視する行き方はやがて大乱痴気の修羅闘争の世界、暗黒不安の時代を作り出すことになりはせぬか。現今各種の騒々しい世界中は一体どう治りがつくでしょうか。

聖徳太子十七憲法の中の、夫れ三宝に帰せずんば、何を以てか枉れるを直うせん、と仰せられた御教による外には安心も平和もあり得ないと思います。

親は生きて居る間は邪魔になり、面倒に思う事もあるが、死なれると淋しく恋しい心が止まぬのであります。私

は親に逝かれてから六十五年にもなりますが、親の事を思い出さぬ日は一日もなかった様な気がします。

「親が仏か、ほとけが親か、思や慚愧に身がちぢむ」

とも唄うこともありましたが、それでもなおひねくれ根性はなおりませぬ。

油谷翁は又私に向って「お慈悲が喜ばれるか」と云われ、歎異鈔の第九章や、第十三章について、いろ〳〵話合いました。

又、私の地方では　寺でも在家でも、一般に御領解文を読みますが、先年或御同朋が、同文中の「自力の心をふりすてゝ」とか「たのみ申し候」などの文句が気に懸り、称えながらも気持がサッパリせぬと云われたので、誠に潜越至極で、恐れ多い事と思いながら、所々を書き換えて差し上げましたところ、後日会つた時、あれで心の淀みがなくなつた気がすると云われました。それは

もろもろの雑行雑修、自力の心がふりすたり（心をふりすてて）、一心に阿弥陀如来、私の（われらが）今度の一大事の後生、御助け候ふとたのもしく存じ候（候へとたのみ申し候）。信（たのむ）の一念の時、往生一定、御助け治定し（治定と存じ）、此上の称名は御恩報謝と聞き（存じ）喜ばしき心地致し候（よろこび申し候）。

この御ことわり聴聞申候事（申しわけ候こと）御開山聖人御苦労（御出世）の御恩、無量百千の（次第相承の）善知識の浅からざる御勧化の御恩と有難く存じ候。

此上は自己の職業を励み（文加入）、定め置かせらるる御掟一期を限り守り申すべく候。

と書いたので、これも翁に書いて差し上げたのであります。

翁は、此御部屋の前庭の梅の木を指して、あれは杖位の木を貰つて来て、七十余年前私があそこに植えたのがあの様になつた。周囲三尺余、高さ三四間の大木が毎年花咲き、餅花が結実するあの樹と日夜相対して、唯一の話相手にしております。私もお前と一諸に長い年月生きさせて頂いたなーと云えば、梅の樹が、ハイ、と答える気がする。この樹を見ない時は、まだ若いつもりになるが、幸に今日まで健康で生かして頂いた事はお念仏の御利益を蒙つて居ると思うと申されました。

過ぎ去りし事は昨日の夢の如く、移り来る明日は未来の夢、早急に来りては直に過ぎ行く。而して遂に終焉、力なくして終る時、彼土に参り、親子、兄弟、夫婦、友人と會し、有縁を化益させて頂くことの幸慶は、我等念仏者のみが感じさせて頂ける事と思うのであります。

（昭和三十四年二月三日。近角大先生御命日稿）

如来さまの御用を

長谷顯性

二月六日は父の命日でありました。父を失ってからもう二十五年たちました。きのうきようのようにおもっていましたが、はや二十五年とは月日の経つのはやいのにおどろかされています。私は生来病気がちであつたものですから、父の先に死ぬだろうと、私もおもい父もそうおもつて不安がっていましたものが、父のあとに二十五年の長年月おくつてまいつたのです。その間に妻も私も年をとり、四人の子供たちも大きくなり、長女はもう私が父をなくした年頃となりました。おもえば遠く来るる哉であります。

父は臨終の枕もとに私の名をよんで申しました。

「お前は一かど佛さまのお心を味っておるつもりでおるだろうけれど、まだなにかとりくつをつけているのは、自分の力を間にあわせているのぢや。世の中のいろ〳〵のことにぶちあたって、どうしてみようもない自分にあたまをさげるようになつたらその時成る程とわしのこゝろがわかってくるだろう。阿弥陀経には『不可以少善根福徳因縁得生彼国』とあるぞ、このところが大事ぢやぞ」

ゆらぐようにむくんだ顔をかしげながらこの言葉をくりかえしつゝ息をひきとったのであります。それから今日まで、私は何かなしこの心のさゝやきにうごかされて、名利愛慾の波風にゆられつゝも、の佛み心を知らしていたゞきたいともがいてまいりましたが、性魯鈍もた〳〵しつゝ、戦争中から終戦を迎えはや五十の坂をも夢のようにすぎてしまいました。

最近私は娘のことから自分はどうしてみようもない自分につきあたりまして、それが縁となって池山先生のお言

葉が身につまされ、如来さまのやるせないお心に気づかせていたゞきました。

『衆生かわいや生死の海に、おのが、罪から浮き沈み、久遠この方子ゆえの廻向、私ひとりをかたおもい』親を泣かせておるこの私でした。そして昨年母をうしないましてこの世に父母なきみなしごとなつて、とどうやら父が臨終にいうた言葉がすなをにうけとれるようになりました。私は父のあの言葉をおもいつゝ長く私をおもいつめてくれたことに気づかされておるのであります。

さてこの父によばれて父の心におうと答えるようになれたことをつら〳〵ふりかえってみますとまこと、に深厚な御因縁のあることに気づかされます。学生時代京都で横田先生におあい出来、親鸞会の皆さまにみちびかれたこと、それから、長らく慈光誌を通じてお教に育てられて来たからに外ありません。慈光誌はこの三月で満十年になられますとか。私は今この慈光誌に動いている如来さまのおんねがいを仰ぎ、このおんねがいに同心してゆきたいとおもうのであります。

如来さまのおんねがいは私をどこ〳〵までも、どこまでも、すくいとらずは、やみたまわぬときいております。私のすべての苦悩をよろこびに転じようとおぼしめしたちたもうたときいております。私の苦しむ限りは、如来さまのおん苦労はやみません。

私は近頃お正信偈を拝誦します時、お聖人さまが「さあ〳〵心配やめて行きましょう」とよんで下さるようにいたゞかれます。これからさき、どうしたらいゝかをいろ〳〵工夫思案して自分でうまくやってゆかねばならぬような気になっていましたが、それは用事のないことだったと知らされました。さる方から、「人にやとわれて生活するのでなくて如来さまにやとわれて生活してゆきなさい、これ程気丈夫なことはありませんよ」と教えられたのですが、心の何処かでもの足りない気がしていたのですが、どうやらそれがうなずけるようなりました。如来さまの御用をつとめさしていたゞくだけのことでありました。慈光誌満十年と承ってその御慈恩を感佩すると共にその御用をうけたまわりたいとおもうのであります。

（昭和三十四年二月十五日）

一道会の記（三）

聚墨生

昨年秋の一道会の模様を三回にわたつて記録いたしました。このほか、西元宗助さんの追憶談や、尼崎の城一雄さんの感銘深い御述懐もありました。また京都の福本慶子さんが「目まぐるしい私の生活、しかもつまづきづめの生活に、フト電車の中やら、往来の途上で、池山先生の御歌や、よく仰言つた歎異抄の断片、等々が心に浮び、それによつてかわききつた心が温め潤わされます云々」。また信国夫人の「夏先生をお訪ね申した時、扇子（うちわ）を持たれて、このようにあおぐと涼しい風が来るやうに、念佛の扇子も称えてその味わいが知れますね」と聞きとられたことな、ど録し尽くせぬものがありました。

○　北岡行男

今から三十五年前、岡山の高等学校で池山先生から独乙語を学びました。然し独乙語の師としてよりも絶対他力の信仰者として尊敬をして居りました。而も当時青春の悩みもあつて先生の門を度々叩きました。

然し種々と教を受けましたけれど当時は身につくにはほど遠かつたのです。其後先生が住吉に移られ、更に京都に変られたので、当時京都に下宿生活をして居た私は紫野や蓮華谷の先生の御宅に伺うておりました。

丁度その頃、吉野から父親が、京都の私の下宿に参りました。そこで先生と父と私と永観堂の紅葉を見に行きました。その時、先生が私の父をかえりみられて

「北岡さん。お互に寄る年波で、無常が身に迫りますね。」

と且つ散る紅葉を眺められながらつぶやかれました。ところがそれまでの私の父は、極めて常識的、科学的なものの考え方で、むしろ反宗教的でありましたが、この先生の

御一言が非常に身に泌みまして、爾来、求道心の切なるものがあり、約十年聞法し、六十歳で廻心をたまわりました。トンネルを出たような、暗闇に電灯がついたような体験を経て、念佛三昧の晩年を送りました。

然し私は切角池山先生の御縁をうけながら、長年物足らなさを持つて過しました。性格的にも、環境的にも恵まれなかつたのでした。

ところが池山先生の十七回忌から、この一道会が催され、先生の御遺徳を偲んで毎年洛北の浄住寺へ出かけまして、榊原先生から皆勤賞を貰つて居ります。それというのも心の夜明けを望んでいたのです。

さて、一昨年のこの会で、信界への一歩を踏み入れさせて頂きましたので、その体験を申します。すべて入信の過程は種々のケースがあり、色々の動機があり得ると思いますが、私の場合、今までになく精神をゆり動かされたような体験をしまして、それから念佛のひびき、味わいも、従来にくらべて、しみ〴〵として参りました。

さて一昨年の十一月三日の朝家を出まして、奈良電に乗つたのでありますが、その時向うの席に七十余りの矍鑠とした元気の良い老紳士と、四十位の商人風の人が居り、二人で頻りに話をして居りました。老紳士が

「近年はとんと紅葉の色が悪くなりましたね。放射能の関係か、気候のせいか……」

と商人風の人に話しかけて居りました。私は初めは、この老人は紅葉の見頃の時に見なかつたんだろう、近年特に紅葉が色悪くなつたなんてことはあるまいと内心せゝら笑つて聞いて居りましたが、フト自分のことに気がついて見ると、秋が来てもそのままくすんで、紅葉もせずに散つて了う木の葉、それは私自身のことだ。人間に生れ、佛縁に触れながら、信仰に染まろうとあせりながら、染まらずに散つて行くのであろうか。

紅葉せず　このまま散るか　散り行くか
紅葉せず　ちぢれ散り行く　木の葉かな

それがそのまゝ私の心境でありました。そうした遣る瀬ない心で、この会に参りました。そして先づ白井先生に「佛様は人間が苦悩のあまりに空に画いたいわば、人間の希望の投影、偶像のように思われてなりませんが」

とおたずねしますと、先生は

「電燈がある。これは誰にも見えますが、その背後に目に見えぬ電流がある。親鸞聖人や、法然上人乃至善知識は電燈であつて、佛は電流ですよ。云云」

と答えられました。お蔭で佛様は、偶像ではないと合点ゆき、その存在をさぐることはもう無用となりました。

次に榊原先生から

「仏の人格性は、善知識を通じてまざ〴〵と我々に触れてくる。」

と教えられこれ又私の心に泌み入りました、その夜は泊めて頂くことになり、花田法兄に深更までぶつつかりました。法兄は真剣に切々と説いてくれました。

「自分は無常が観ぜられぬ。又罪悪感が徹底せぬ、それだから、いくら信仰の話を聞いても駄目だ」

と思つていたことがひつくりかえされて、そういうことでなく、歎異鈔の第二章、「ただ念仏して」一つだ。無常観に徹せず、罪悪を自覚出来ぬ者故に「ただ念仏して」とお勧め下さるのだ、斯ういうことを知らされて、私の心の中がすつかり掃除されて「たゞ念仏」一色となりあゝそうだつたかと落着かせてもらいました。

やがて次の朝を迎へ榊原先生、花田法兄、私と相向うて座つて居りますところへ、昨夜帰られた城君が、尼崎から再び訪問せられ、花田法兄に対して二言、三言話すうちに、涙をためて、真剣な態度で

「先生、たゞ念仏だけですね。この上はたゞ念仏だけですね。」

と強く言つた。それが傍で傾聴していた自分へ感情移入して、その城君が自分を代弁してくれているような、いや自分が城君になつた様な、いや二人が一人になつてしまつて、異常な感動が自分を襲いました、電流のようなものが脊柱に沿うて流れ全く感激の嵐に包まれました、脊筋が硬直し肩が震ひやがてそれは動哭となりせきを切つて涙とともに念仏が出初めました。そうした状態が何分続きましたでしようか、やがて自分を取りもどし、フト隣りに座つている城君を見ると、意外にもケロリとしています。何のことはない、城君の質問によつて触発された火が、火元は小火ですんで類焼のこちらが大火事になつて了つたので、城君には済まないような、気の毒なような感謝したいような複雑な気持でした。

さてこのことは私の求道途上の大きな体験となりました。帰途に苦寺に寄りましたが、秋火にかゞやく苦が一しお印象的でした。

目覚むれば　秋日一杯あたりおり
鵙高音　心展けし嬉しさよ

帰宅して老妻をしげ〴〵と見ました。その細い肩！長らく苦労をかけたなあと心で託びました。家内は私の顔を見て、「京都でよい事があつたのですか」とよろこんでくれました。

老妻の　顔ほころびし　秋灯下

真夜中目が醒めた時、腹底から湧然として、悲しみとも喜びともつかぬ、悲喜を越えた一種いうべからざる情調、孤独感と寂寥感を含んで、永遠と一脈通うた情調が、滂沱たる涙と共に湧いてきます。このしみ〴〵とした嬉しく悲しい深々とした情懐は久しく憧憬してきた親に遇うた心境でありましようか……。

その後、心の肩がほぐれ念仏のひびきが日常の物の考え方に現われ、自然に念仏が出、生活の基調が念仏となつたと、冷暖自知の感を持つております。

これひとえに池山先生の御精神が私を導いて下さつたので、自分の様な欠点の多い者に、ようこそと、感謝の外はありません。

○　松本解雄

こういう会合、意義深いこんな集りは日本国中、おそらく外に現在無いのでないかと思います。

白井先生の深いお味わい。花田さんの師に対する感懐、只今は北岡さんの生々しい法悦を承りました。斯り云つた会は外にないのでないか。宗教の会合は沢山ありますが、形式的、儀式ばつています。仏様ということについても偶像化していないかと感じます。

私は愛媛大学に勤めて居りますが、会合があつて昨日参りましたが、その途中神戸の治田康さんを見舞いました。そして今日のことも語り合いましたが、治田さんの言われるに

「池山先生に、浄住寺は紅葉のよい処ですと申しましたら、私も一度伺いたいとおつしやつて居られましたが、御存命中は実現出来なくて、御遺骨となられて浄住寺様におさまりになり、およろこびのことと思います」

とのことでありました。

私の池山先生についての思い出の最初は、先生が甲南高校から昭和四年に大谷大学へ転任せられました。その時京都の鍵屋で二十人ばかりで集いをして先生を迎えました。その時集つた方々で、すでに戦死されたり、病死されたりされました方々もあります。

さて、私共の自己紹介が済みますと、例の調子で先生が立ち上られて、初めに「古池や蛙飛びこむ水の音」の芭蕉の句を引かれまして、集つている私共の友人は皆若い者ばかりでありますのに、その口から御念仏が出ているのを聞きとられて、念仏は古池にのみ湧く沼気に似て、久遠却来の古さを持つことをお話しになりました。これが最初の強い印象であります。

又、私が追悼録にも書きましたが、先生のお宅に伺いますと、何時も変らず「サア、ドウゾ」としぶい声で応接間に導いて下さつた面影が忘れられません。

又、すでに戦死された林田英夫さんの最初の奥さんの睦子さんが急死せられた時、その葬儀が終り、霊柩車が火葬場に向う時、先生は礼服で出席せられて、林田さんの霊柩をじつと見まもつて、静かに見送つて居られたお姿、そこに人間のつながりを越えた、永遠のつながりを感じられました。

又、先生は独文学を専攻せられたせいもありますが、一言、二言いわれることでも、何か禅的と言いますか、普通に用いられぬ、適切なものがありました。或冬の日、奈良の浄教寺へ先生のお伴して参りました。その日は特に寒い日で、部屋で火鉢をいれオーバーを着ていても身にこたえる日でした。その時講話を終られて

『今日は声が凍えてしまつたよ』

と言われたのが耳の底に残つて居ります。

更に最後の御病中でありましたが、先生の奥様は平素西宮の女学校に勤めて居られ、土曜、日曜と帰られ、他は西宮に泊つて居られましたが、御病中は毎日通勤せられました。今と違つて、当時蓮華谷のお宅から金閣寺の電停に出られ、朝六時京都駅発の列車に乗られ、洗顔なども車中でせられるという大変なことでありましたが、一度も不平も愚痴も言われませんでした。聖人の場合のように先生は心から御家族から慕われて居られました。私共は全く慚愧の外はありませんが、先生の徳の家中に溢れているのを感じました。

私は懈怠で愚かな者でありますが、それなればこそ、一層恵まれて参りました。中学時代に近角先生の歎異鈔を頂いて居ります。京都では親鸞会で、池山先生、横田先生と御縁を頂いて居りました。只今松山にも、東京にも、よい法縁に恵まれて居りますが、地上に、よきひと、善き知識に遭うことは、即ち得道の人に接し得たことは、大事なことであります。過去のよき人々はとかく偶像化され易いので注意が大切でありますが、この世に、よき師、よき友の謦咳にふれることは誠に有難いことであります。

編集後記

二月の中頃から毎朝のように庭に鶯が来鳴いて春の訪れを知らせてくれますが、もう彼岸も近づき、新緑の芽萌えに野も山も彩ら初めて参りました。

慈光誌、満十年を迎えました今月、よき師、よき友に、且つ謝し、且つ愧じ、無量の感懷をもつて三月号を御送り申し上げます。

○

△「超人生と即人生」は近角先生の大正九年五月、求道十六巻一号に載せられた御法話でありますが、水際だつて他力信の妙消息を知らせて下さる貴重なものであります。二回に分けて転載させて頂きます。

即人生のない超人生は不徹底であり、真に超人生するものは自然に即人生にかえるのであります。即人生にてとどまつて超人生のひらけない者には人生は出ようのない袋街であります、即人生の出ない超人生は野孤禅の域にとまるものであります。「念佛は世を出る声であつて同時に世に入る声」であります。繰り返し御精読願います。

△「善知識を訪ねて」の福島先生の御講話は、広大無辺の佛成道の御境界を菩薩方によつて讃歎され、心も言葉も及ばぬ不可思議の御味わいを教えられます。

△「過去の夢未来の夢」の三瓶老師の御原稿は、御身辺にただよう法味をそのまゝ告げて下さいました。夢について

夢の世を夢と見つ見つはかなくも
なおおどろかぬ己れにあるかな
西行法師

夢の世をあだにはかなき世と知れと
おしえてかえる子は知識なり
泉式部

を思い併せられます。

△「如来様の御用を」は長谷さんの信の旅に、恰も硬い地を割つて春の芽が萌え出ずるような嬉しさを拝読いたしました。

△一道会の記は今回で一応終らせて頂きます。本年の集いにも、赤色赤光、白色白光、黄色黄光の浄土の香りを頂きたいものであります。唯皆様の御無事を念じながら筆をおきます。

御住所紹介

東京都調布市仙川町七九四番地　福島　政雄
島根県温泉津局区内井田　三瓶　徳英
富山県井波局区内縄之内　長谷　顕性
奈良県吉野町上市局区内立野　北岡　行男
愛媛県松山市南柳井町四一坂口方　松本　解雄

御案内

○毎月第一、二、三日曜例会、一道会館、午后一時半。市電新郊通り一丁目下車。

○毎月二十四日午前午后、市内小桜町教西寺法話会。市電御器所通下車

定価　一部　二十円（送共）
半年　百二十円（送共）
一年　二百四十円（送共）
名古屋市南区駅上町二ノ二八
編集・発行人　花田　正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　本田　政雄
名古屋市南区駅上町二ノ二八
発行所　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番